

「学びをデザインする子ども」とアフォーダンス

梅田 翼

1. 研究主題との接点

本校の研究主題『「学びをデザインする子ども」を育む教育課程の創造』にある、「学びをデザインする子」とは、「学びが自分（たち）のものであると自覚し、学びの目標、道筋、表現方法を思考し選択している状態」のことである。

この様な子どもの状態を引き出していくためには、自分でもなにかできるのではないだろうかという自己効力感や、他者や集団の中での自己有用感を高めていくことが必要であろうと考えた。そして、それらを高めていくための一つの手段として、アフォーダンスを考慮した学習環境を整えていくことが有効であるとの仮説に基づき、本実践を行うこととした。

アフォーダンスとは、アメリカの心理学者ジェームズ・ギブソン（James J. Gibson）の作った造語で、「与える」や「提供する」という意味をもつ英語の「アフォード(afford)」を名詞化したものであり、「環境が動物に与え、提供している意味や価値」のことである。

例えば、本校と教室にあるもので言えば、校内にある生き物のいる池の存在は、「生き物を採ることができる」ということをアフォーダンスしており、教室にある虫かごや虫取り網は「生

き物を取って飼うことができる」ということをアフォーダンスしているのである。

アフォーダンスの中には動物にとってよいものもあれば、わるいものも存在する。本実践においては、子どもたちの自己効力感や自己有用感を高めると考えられるようなアフォーダンスを意図的に学習環境の中に整えていくことで、「学びをデザインする子ども」の姿を引き出していくことを目指すこととした。

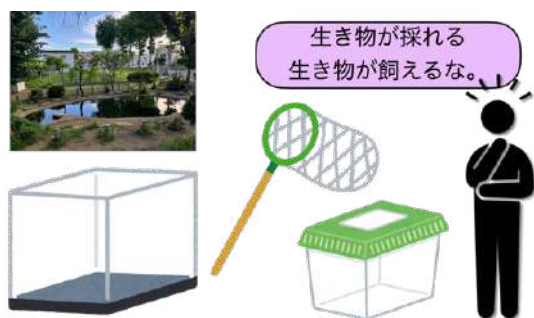
また、子どもたち自身が感じ取っている様々な学習環境のアフォーダンスを、「学びをデザインする子」にとってよいものとして受け取ることができるように、改善したり、捉え直したりすることができるようにすることで、3年生以降の Laboratory や Class の学びにつなげていくことができるようにすることを目指すこととした。

2. 本単元の概要

(1)単元の趣旨

本単元は、生活科の内容のまとまりのうち、第2の階層「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」の内の(5)「季節の変化と生活」に関わるものである。

2024年9月18日、東京では82年ぶりに猛暑日の最も遅い記録が更新された。10月の夏日は12日あり、1875年の統計開始以降で10月の月間最多記録となった。さらに言えば年間の東京の夏日は、2023年に143回。2024年は153日である。1年の中で



夏が占める割合が高くなってきているのである。これは、学校の中の自然観察を行った際の子どもたちの体感としても感じられていることで、秋の訪れが遅くすぐに冬が訪れたように感じていた。

このような状況の中で、子どもたちの生活に根ざした年中行事に目を向けて、季節の変化やそれに伴う人々の様子の変化に気づくことができるような単元を構成することとした。

単元を構成するにあたっては、1月という時期から考えて、年末年始の行事や風習に焦点をあてることとした。そうすることで、子どもたちも自らの経験を想起しやすいと考えた。また、行事や風習は経験して知っていても、それにどのような意味や願いが込められているかは知らないという、気付きも得られやすく、問いも生まれやすいと考えた。

(2) 本単元におけるアフォーダンス

本校では、低学年での学習を「総合学習活動領域」という一つの領域の中で計画し、実践してきた。その中核をなすのが、「総合学習」である。これは、できる限り子どもの願いや求めを出発点とし、それができる限り大きく膨らむことを意図しながら学習を進めていくことになる。

アフォーダンスは、子どもたちの願いや求めを生み出すきっかけであり、そこに教師の学ばせたい、経験させたい、こんな力をつけて欲しいという願いを重ねる手段となり得ると考えた。

そこで、本単元では次のような学習環境をヒト・モノ・コトの視点で整えた。

① ヒト

・わからないを楽しむ雰囲気

子どもたちの様子を見てみると、「知っている」ということに対して、「間違っているかもしれない」という様な批判的思考は働きづらいところがある。また、「知っている」ということがいいことであり、「知らないこと」が良くないことであるというような意識が根強いもののように感じられる。しか

し、「知らない」「わからない」「間違っているかもしれない」ということへの気付きが、新たな問いを生むうえで欠かすことはできない。

そこで、学びの時間を共有する教師やClassの仲間が、「わからない」ことを楽しむ雰囲気を作ることができるように、授業の中で「知らない」「わからない」「間違っているかもしれない」という気づきを積極的に取り上げていくこととする。

② モノ

・書籍の用意

子どもたちが、何か疑問を感じ、問いを持ったときに、実際に問いを解決しようと行動に移すことができるかどうかは、その子が解決するための道筋を見出すことができるかどうかという点の影響を受ける。

そこで、本単元で扱う年末年始に行われる行事や風習に関わる書籍を教室内に設置し、問いを解決する手段が存在するかもしれないと、子どもたち自身が感じられるようにする。

また、メディアルームにある百科事典や、一人一冊持っている国語辞典なども、調べ学習に活用することが可能であることに気づけるように、様々な授業の中で活用する場面を設定したり、解決の手段の一つとして紹介したりする。

さらには、年末年始以外の行事や風習についても書かれている書籍も用意することで、「年末年始の行事や風習以外のものも意味やよさがあるのではないかな」と学びが広がり深まっていくことが期待できるような環境を整えた。

③ コト

・関連した内容を、他の授業に散りばめる

国語の中で伝統的な言語文化に関する指導として「かるた」を扱う単元がある。この単元の中で、新春の風物詩となっている「かるた始め」にふれた。自分たちの知らない

伝統的な行事が存在していることに気づかせたり、実際にかるたを用いて遊ぶことを通してその楽しさに気づかせたりすることをねらった。

また、物語文である「かさこじぞう」では、歳の市について物語の中で触れられており、年末年始の生活に興味を持つ子どもたちがたくさんいた。さらには、東京都指定無形民族文化財である世田谷のボロ市も、もともとは歳の市であることに触れ、ボロ市と言われるようになった由来について触れることとした。そうすることで、年末年始の行事や風習についても何かしらの由来があるのではないかと考えることができるようにした。

図画工作の授業で取り組んだ「福笑いづくり」では、福笑いが正月遊びであることや、新年の幸せを願って遊ぶようになったことなどに触れた。この経験から、子どもたちが年末年始の行事や風習には何かしらのねらいや願いが込められているのではないかと考えることができる素地となるようにした。

また、子どもたちは失敗と捉えがちな、面白い顔になってしまうことが、「笑う門には福来る」のように、出来上がった顔がおもしろいことで笑顔になれるので良いことなのであるという、失敗や知らないということに対しても楽しめたり、受容できるよ

うになったりする素地づくりの機会となるようにした。

3. 実践経過

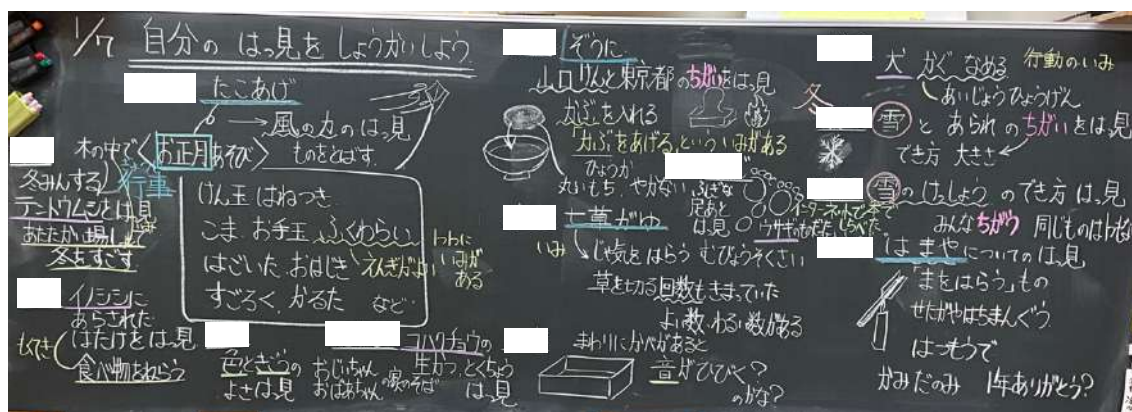
(1) はっけんカード発表会（冬休みの宿題）

子どもたちののはっけんカードの内容を見てみると、年末年始の行事や風習に関わるものを35名中12名が記載している。また、冬の生物に係る内容を8名、冬の気候に係る内容を6名が記載していた。季節の変化に関わる、様子の変化に気づいている子どもたちが多くいることが伺える。

発表の内容を聞いてみると、年末年始の行事や風習については知っていても、その由来や意味について知っている子どもは少なく、お正月遊びの福笑いには縁起が良いから行うのだと言う程度の知識しかない。しかし、「1つ1つに、意味がある」といった話なども出てきており、「年末年始に行われている行事や風習には、1つ1つに意味があるらしい」ということに気づき始めている。

(2) 福笑いづくり（図画工作）

単元の第1時を受けて、図画工作の授業で「福笑いづくり」を行うこととした。昨年度の1月には、昔遊びとして、けん玉やお手玉、凧揚げなどの活動を行っているが、お正月遊びで



はっけんカード発表会の板書

ある風揚げで、「風が高く上がるほど元気に成長すると言われている」といった話には触れていない。

今回の活動では、「笑う門には福来たる」といった言葉に触れたり、「新年の幸福を願って行われる遊び」であることにも触れたりしながら活動に入ること、年末年始の行事や風習には、意味や願いが込められているのではないかとということに気づくことができるような土台を整えることとした。

活動の中では、面白い顔になることを楽しむような言葉が子どもたちから発せられると共に、楽しみながら遊ぶ姿が見られた。



(3) かるたであそぼう (国語)

授業のはじめに、かるた始めという新春の行事に触れた。使われているのが百人一首という短歌が書かれたものであることや、京都の八坂神社で伝統行事として行われていることなどを紹介した。



(4) かさこじぞう (国語)

かさこじぞうは、貧しいおじいさんとおばあさんが大晦日の夜に経験した不思議な出来事のお話である。お話の中では、「年の市」におじいさんがかさを売りに行き、そこで餅粉を買ってこようとするなど、年末年始の行事や風習に関する描写がある。子どもたちは、本文に出てくる普段使わないような言葉に加えて、年の市などの言葉の意味について、興味をもっている子が多く見られ、どんなものを売っているのか興味をもっていた。また、世田谷のボロ市が話題に上がるなど、身近にある歳の市についての知識も持っていることが伺えた。

(5) 書籍の準備 (環境を整える)

子どもたちの目が、年末年始の行事や風習に向くようにするために、年末年始の行事や風習に関する書籍や、年中行事に関わる書籍を教室内に置き、すぐに手に取る事ができる環境を作った。

書籍の世田谷区のボロ市、世田谷区立図書館の司書と連携しながら行った。

(6) 研究テーマを決める

研究テーマを決める際には、子どもたちの多くが前時の授業で興味を持っていたおせち料理や除夜の鐘について扱った。扱う際には、それについて知っていることはどのようなことがあるのか整理し、知っていることが不確かであることや、よく知らないことがあることを明確にした。そうすることで、知らないことがあることが、研究テーマにつながる「ふしぎのたね」となること、不思議に思っていることでも、こうなのではないかという予想がたてられることに気づかせた。また、自分が興味を持ったことを調べる手段として、教室に置かれている年末年始の行事や風習に関わる書籍の存在を確認させたり、インターネットなどを活用したり、インタビューをおこなったりする方法が存在することを過去の学習を想起させることで確

認した。

(7) 自分の研究テーマについて調べる

研究テーマについて調べる際には、書籍を用いる子どもが多かった。インターネットを用いて調べている子どもの多くは、書籍で調べたあとに更に調べるためであったり、書籍では調べられなかったことを調べていたりする子どもがほとんどであった。

また、授業の最中に、別の書籍（主に百科事典のポプラディア）でも調べたいから、メディアルームに行きたいと申し出てくる子がいるなど、書籍での調べ物を中心に考えている子どもが多かった。

その結果、子どもたちにとってもわかりやすい情報源から信頼に足る情報を得ることができた。その反面、インターネットを用いた子どもたちの中には、そこに書かれたものがよく理解できずに困っている子もいた。

書籍とインターネットの違いに気づき、インターネットは手軽に調べることができるものの、書籍のようにわかりやすい情報源はなかなか見つけられないことを知ることができた。

(8) わかったことをまとめる

まとめる際には、以下の点については必ず盛り込むように指導を行った。

- ・研究テーマ
- ・研究テーマを選んだきっかけや理由
- ・調べる前の自分なりの予想や知っていること
- ・調べてわかったこと
- ・感想や振り返り、その行事や風習のよさ

上記の内容についてまとめさせ、発表用の資料として、Keynote を用いて発表資料を作成させた。

Keynote を用いた発表資料を作成する際には、自分の調べたことの中で大切な部分をキーワードとしてスライドの中に乗せるように指導した。その過程の中で、何度も調べたことを読

み返したことで、自らが調べたことを再確認し、学びの成果を実感している様子が見られた。

まとめが一段落した子どもたちからは、他のことについても調べてもいいかと質問が出たり、「次は〇〇について調べてみたいな。」といった発言が聞かれたり、自分の研究テーマを設定して、解決していくことに対して、積極的な姿勢を見せることも多かった。

(9) 研究発表会

発表会に向けて、子どもたちは年末年始の行事や風習について様々なことを調べていたの、仲間が初めて知ることや発表をすることができていた。聞き手側は、自分の知らないことを沢山聞く中で「えっ?! そうなの?」「知らなかった!!」と声上がるなど、年末年始の行事や風習についての興味や関心の高まりが感じられるような反応が見られた。

また、子どもたちの振り返りを見てみると、「もっと知りたくなった。」「発表を聞いて、自分の知っていた事に自信が持てた。」などの意見が見られた。

さらには、前時と同様に、もっと別の行事や風習についても調べたいと話す姿が多く見られた。

(10) 活動全体を振り返る

Class の仲間に、自分の調べたことについて発表したり、仲間の発表を聞いたりすることを通して、子どもたちは行事や風習を通して人との関わりが増えていることに気づくことができた。その結果として、自分自身の生活が楽しいものになっていることに気づくこともできた。

また、それらの意味を知ること、前向きに自らの生活の中に取り入れていこうとする発言が多く聞かれた。

4. 考察

アフォーダンスを意識した学習環境を整えることで、調べ物をする際にはどのような資料を使って調べられるかなど、休み時間などを用いて書籍の内容を確認している子どもも見られた。さらには、書店で使えそうな書籍を探し、用意してきた子どももいた。

これは、「学びをデザインする子」の定義の中にある、「学びが自分（たち）のものであると自覚する」「学びの目標、道筋を思考し選択する」に当たると捉えられる。

生活科の「季節の変化と生活」に関する指導としてみたときには、年末年始の行事や風習に着目して作った単元なので、冬という季節については学ぶことができたと言っているだろう。しかし、他の季節についても同じ様に扱って学んでいくこと無しには、季節の変化を意識していくことは難しい状況であった。しかし、子どもたちの意識は、他の季節の行事や風習にも目が向いているので、その様な単元を年度当初から設定して継続的に指導していくことで、生活科の目標も十分に指導が可能なのではないかとその可能性を感じることができた。

5. 成果と課題

アフォーダンスを意識した学習環境を整えることは、子どもたちの「学びが自分（たち）のものであると自覚し、学びの目標、道筋、表現方法を思考し選択している状態」を引き出すことに寄与する可能性を見出すことができた。また、自らが設定した研究テーマについて調べまとめることができたという経験が子どもたち自信の自己効力感や自己有用感にどのような影響を与えているのかを客観的なデータで把握し、その後の学びへの影響を把握していきたい。

また、3年生以降のLaboratoryの時間などで、今回のような経験がどの様に生かされてい

くのかを把握し、より良い実践のあり方について検討していきたい。

(梅田翼)

【引用・参考文献】

佐々木正人 (2015) 「新版 アフォーダンス」 岩波書店

東京学芸大学附属世田谷小学校 (1995) 「個のよさが生きる授業」 東洋館出版社

東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校 (1996) 「個のよさが生きる学校」 東洋館出版社

東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校 (1998) 「個のよさが生きる総合学習の展開」 東洋館出版社

東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校 (1999) 「子どもとともにつくる総合的な学びの場 だから学校大好き」 東洋館出版社

文部科学省 (2017) 「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説生活編」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_006.pdf (2024 年 11 月 1 日確認)

鎌田和宏 (1999) 「子どもと共につくる総合学習」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/socialstudies/1999/82/1999_7/_pdf/-char/ja (2024 年 11 月 1 日確認)

世田谷区 (2024) 「世田谷区のボロ市」 <https://www.city.setagaya.lg.jp/02072/10108.html>

(2025 年 1 月 6 日確認)